

御堂筋を織りなす要素を再構成し、
ひととひとの繋がりが生まれる柔らかで美しい風景を創出する。

御堂筋は景観規制により統制された大文字の都市空間であり
大阪の中でも地下鉄・自動車・人々が高密度に凝縮した象徴的な場所のひとつである。
そこには特有の美しさと同時に
それぞれの要素が独立したまま統制され
支配されているような窮屈さも存在する。

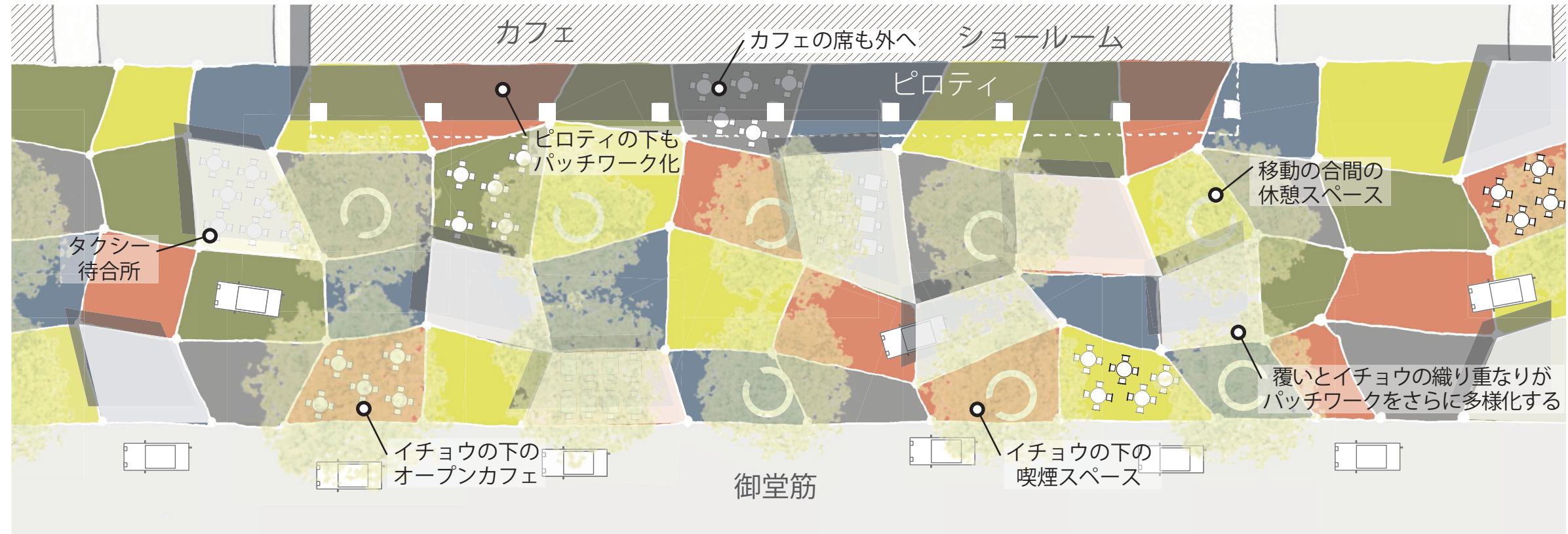
そこで本計画ではその美しさを保ちながら
人々が歩いているだけ自然と様々な関係性を構築できるように
『柔らかさ』を御堂筋に内包させることを目的とする。

パッチワーク状の舗装と地下鉄の風により
御堂筋に凝縮した要素が積極的に関係づけられ
その多様性によりコミュニケーションがネットワーク化される。
そのひとつひとつの場面が直線状に展開し
美しいイチョウに織り重なる。

車道の本線を残し、イチヨウが植わる植樹帯までを、ボンエルフを想定したパッチワーク状の舗装とすることで、御堂筋の歩道空間は人々が滞在のしやすい多様な場の集合体となり、コミュニケーションのネットワークが形成される。

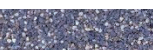


ボンエルフにより人と車が共存する



舗装の異なる比熱による温度差が微風を引き起こし、微気候が御堂筋に生まれる。その微気候は一日の経過、さらには季節の移り変わりの中で、多様な場を作り出す。また素材の色味はイチヨウの四季の変化も象徴する。



		樹脂	1.61			芝	0.80
		木材	1.25			廃ガラス	0.67
		コンクリート	0.84				

地下鉄はその地下の膨大な空間の中で絶えず大量の空気を生み出している。通気塔から常に吹き出すこの空気は都市生活の副産物として莫大なエネルギーを有している。そこで、この空気を浄化し、やわらかな覆いとして形を与えることで、御堂筋線のエネルギーを地上の人々へと還元する。

